

北社会ニュース 第15号

2005-8-17

発行：鈴木壮夫

本日の講師、田村精誠氏（高25回）が起業した（株）フューチャートラスト・第1回投資家向説明会が開催されるというので、7月28日（木）に私も参加しました。会場の六本木ヒルズも初めて行きましたし、「IT企業」の概要に触れること、こちらも初めての体験でした。

私が大学で学んだ科目の中で、今でも役に立っている一つが「マーケティング」です。七年前、そば屋を立ち上げた時、そば屋としての「伝統」も「のれん」も「看板」も無い素人の店が本職（？）に伍して「存在」を維持し続けられるコンセプトが課題でした。「マーケティング・ハート」という大学の恩師の夏期ゼミナールの講義録を何回も読みなおしました。私の結論は「ONLY ONE」でした。このコンセプトに基づき努力し、大筋間違っていなかったと私自信納得しております。しかし、採算はP/L POINTをウロウロ。乗り越えねばならない課題です。私はこういう視点で田村さんのお話を聞きました。会員の皆さんも「自分自身の視点」でアドバイスを聞いて下さい。

来月の口演

9月21日（水）講師・堤堯氏（高7回）

堤先輩が「文藝春秋」の編集長をつとめておられたおり、スポーツ紙のデスクを集めて、座談会を掲載されたことがあるそうです。タイトルは「もう一般紙なんていらないよ」、リードに「一般紙はタテマエ、オレたちはホンネで勝負」と「阿呆の遠吠え」のあとがきにお書きになっておられます。

毎週月曜日「東スポ」を購入、堤先輩のコラムを楽しんでおります。

一般紙とは異なる視点が楽しいのです。最近のコラムを紹介します。皆さんも講読を！

コラム <175> 8/8

ディスカバリー、野口さんの「船外修理」でメディアはお祭り騒ぎだが、どうも釈然としない。打ち上げ費用は一回、約600億円、うち日本負担は200億円。コラムのタイトルは「スペースシャトル計画ってサギ？日本に大金負担させて科学的成果ゼロ」

コラム <176> 8/15

いったい誰のための郵政民営化か？騙されてはいけない。日本国民の資産、郵貯簡保340兆円を売り渡してはいけない。コラムのタイトルは「340兆円資産を米から守る戦いだ」と郵政民営化反対派は今こそ訴えよ」

9月21日の口演を楽しみにして下さい。

講師の自薦他薦をお願いします。10月と11月、世話人までよろしく！

8月17日

本日8月17日は親父の命日です。

昭和42年（1967年）、最後は癌に負けた66年間の人生でした。その日から38年間で過ぎ去り、私は26才から64才になり、親父の人生まであと2年となりました。

毎年、この日は親父の写真を前にして「二人だけ」で酒を呑みます。親父の人生と自分の人生を何ということなく、振り返るだけです。今年は宮城県沖地震が報道されている前夜、呑み始めます。まことに勝手ですが、お付き合い下さい。

亡くなる二年前、昭和40年8月親父は「胃潰瘍」の手術を受けました。手術が終わり、手術室のドアが開き看護婦が「息子さんかどなたかお一人だけ」と呼ばれ、長男の私が部屋に入りました。執刀医さんが切除した胃を私に見せて、説明された後、「お父さんが半年生きる可能性は30%程度です」と断定された。思ってもいなかったことで、文字通り青天の霹靂でした。当時私は東京・大田区の自動車部品メーカーの入社二年目の社員でした。親父は仙台で製麺業者でした。その後、結果的に二年間生き長らえました。

癌との最後の戦いは壮絶そのものでした。私も仙台ー東京を頻繁に往復しました。夜勤の看護、自分の担当時間に寝込んでしまったこと、再三でした。母はその点しっかり看護していました。あれ程、父を激しく非難していたのに、やはり夫婦でした。亡くなる前日、東京に戻ると言うとき親父は「帰るな」とメモに書いた。喉から栄養を取っており、もう声は出せなかったのです。それでも、私は帰りました。二高プラバンの一年後輩・松永雄治君（現・東北放送常務）の運転する車で六号線を南下しました。後部座席で寝込んでいた。車窓の外側から親父が私を覗き込んでいる夢をみた。

亡くなってから、唯一の反省は親父に「癌」を隠し通したことでした。「癌という事実と余命について」私は話すべきでした。親父は親父なりに自ら人生に決着をつけたであろう「男」であり「人間」だと思っただけです。今でも慚愧に堪えず、ここで酒がすすむ。

親父の死は家庭の経済でもピンチでした。当時、債権債務を整理すると、僅か数十万円しか残らなかった。私もサラリーマン生活に希望を持てなかったので、予定通り退社して、仙台に戻り、親父の製麺業を継ぎました。すぐ、その選択が失敗だということに気が付いた。

昭和42年からの二年間、「真に遅かった自我」に悩みました。事業は熱心にやり、経済的ピンチは脱した。しかし、何をやって生き抜くかはなかなか結論が出なかった。そんな時、出会ったのが一冊の本でした。高橋和巳著「我が心は石にあらず」ですが、私にとっては次の文章がその時からの心の支えになっております。親父が死をもって、私に授けた信条だと思っております。

「自己の自由の拡大や経済生活の向上のためにのみ人は闘うものでないこと。
究極においては何者かへの奉仕こそが人を支え勇気づけるものであることを
確認した」

今年も「何者かへの奉仕」の心をより新たに堅持していけるよう、親父！乾杯！